

# 目の下に涙ひとつぶづつ雛

田中裕明（『櫻姫譚』）

雛祭りは毎年巡ってくる。そして年々雛道具合戦はにぎやかになっているようだ。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家 芭蕉

から思うと、雛の句もさうとう現代的な変貌を遂げていると言えるだろう。

飴山實さんの『季節の散歩道』によれば、「旧暦から太陽暦にかわって厄介になったことの一つに、桃の節句に桃がまだ咲かないことがある。桃の節句、曲水の宴、草餅、野遊び、磯遊び、鶏合せなど、昔はどれも三月三日のものであった。とうの昔に途絶えたものも、雛祭りと一緒に、今の四月、旧暦の陽気の中で思いを至すと、かなり理解できるものがあるが、太陽暦の三月初旬に置くとそれも難しい。」とある。

現代では太陽暦がしっかり定着しているので、3月3日の雛祭りはまだ少し肌寒いイメージだが、たしかに4月3日の季感であれば、桃の節句も野遊びも磯遊びもずいぶん気持のほぐれる楽しいものであったろう。

掲句は、裕明には珍しく破調の句で、五・九・三のリズムだ。『櫻姫譚』で掲句の右隣に位置するのは〈赤子が乗りてこはれる箱や涅槃寺〉であり、こちらも七・七・五の破調である。『櫻姫譚』そのものが序破急の破にあたる句集であるが、句作はリズムにおいても変化を求めた時期があったのだったろう。